

平成26年度 第1回 里地里山保全・活用検討会議

■日時

平成26年10月9日（木） 10:00～12:00

■場所

砂防会館 穂高

■出席委員

進士委員（座長）、石井信委員、石井実委員、岩槻委員、金井委員、竹田委員、中越委員、宮林委員、松井委員、鷺谷委員

■議題（「生物多様性保全上重要な里地里山（重要里地里山）」の選定に向けた検討）

議題1. 本年度業務の進め方について

議題2. 重要里地里山候補地抽出にかかる検討について

議題3. 地域別分科会における検討事項について

■会議資料

資料-1：本年度業務の進め方について

1-1：重要里地里山の選定にかかるこれまでの検討結果

1-2：評価・選定のために提示した基礎情報図のデータ一覧

1-3：選定の具体的進め方

1-4：年間スケジュール

資料-2：重要里地里山候補地抽出にかかる検討について

2-1：候補地抽出の考え方・方法

2-2：候補地案一覧（一部資料を除き委員のみ配付）

資料-3：地域別分科会における検討事項について

3-1：候補地の精査の方法、選定数について

3-2：候補地データベースの作成について

■議事録

環境省あいさつ（自然環境計画課長）：

- ・平成20年度より継続して開催している本検討会でのご議論を踏まえて、「里地里山保全・活用行動計画」を策定し、全国での里地里山の自然資源の持続可能な利用を進めようとしている。
- ・平成24年9月に閣議決定した現行の生物多様性国家戦略を踏まえ、今後の人口減少、高齢化が非常に著しい、特に、中山間地里地里山の自然資源をどのように維持管理していけばいいのか、そういうところには生物多様性保全上非常に重要なところもある。本年度、そのような里地里山を抽出し、その上で、今、並行して進めている湿地や海域の生物多様性保全上重要なところと相まって、生態系ネットワークという国土の全体から見たネットワークづくりを目指していきたい。

事務局：

- ・議事に移る前に、中越委員より提供いただいた冊子について紹介いただく。

委員：

- ・日本生態学会で今年3月に広島で行われた公開講演が、この「里山のこれまでとこれから」というシンポジウムであった。今年が7年目で7回目となるが、毎回、冊子をつくり資料として配っている。
- ・里山について学位論文を書かれた徳島大学の鎌田氏を筆頭に、現在一生懸命研究されている深町氏に里山そのものの多様性について書いてもらい、萌芽能力が里山の基本であるので、特に萌芽林に関して伊藤氏に書いていただいた。それから、本検討会委員の石井先生には、チョウをキーワードに、里山を守ることの意義について書いていただいた。白川氏は小さな博物館の学芸員だが、絶滅危惧植物と里山をテーマに書いていただいた。また広い意味で、草地も里地里山の広い範囲の中に入ると思うため、高橋氏に関連の取組について書いていただいた。阿蘇でやっている方式は、ある種スタンダードであると思うが、行政的に里山を守るのはおそらく限界もあるため、地域住民に守ってもらう。実際に実績もあり、過疎化などで地域の人たちの数が少なくなった時に、まちの人をどうやって参加させるかという仕組みとして紹介させてもらったものである。冊子の一番後ろには、関連ホームページ

ージのアドレスをつけているため、見ていただければいろいろと活動がわかるのでは。

【議題1. 本年度業務の進め方について】

(事務局説明)

座長：

- ・資料1に関して、指標①～⑨は、それぞれマッピングされていると思うが、その作業途中のものはここにあるのか。

事務局：

- ・本会議資料としては準備していないが、以前、候補地の抽出に際して先生方に個別にお送りした資料に含まれている。

座長：

- ・今の指標は非常に細かくできているため、重ねたものだけでなく、一番ベースのデータをそれぞれきちんと整理しておかなければいけない。

委員：

- ・手順としてこういう進め方でいいと思うが、データを見てみて、若干考慮したほうがいいこともあると感じた。
- ・今のやり方だと、生物種をある程度根拠にして地域を選ぶこともあるかもしれないということだが、その種のデータは少し古く、今はいなくなっているところが結構入っているということ、移入や偶然で記録があるのではというようなものもある。
- ・データを根拠にすることは重要だが、であればもう一度、ちゃんと、そこに生息・生育が認められるのか確認が必要ではないか。さらに、分類群ごとに専門の先生に選んでいただいたときに、それぞれの先生がどういう基準で選択されているかを、非専門家もそれを見ながら考えることになるため、種の選定根拠についても説明が必要と思う。
- ・そういう問題点もあることを踏まえると、生物多様性関連のデータとして、モニ1000里地調査など現状に近いデータはモニタリングの体制も整っているため、そうしたデータを重視すべきではないか。

- ・ラムサール条約登録湿地についても、研究者や市民が参加し生物相のデータが存在するところが多く、それをもとにいろんな自然再生の活動が行われているところもあり、広く言えば里地里山の活動になっていると思うため、もう少し重視したほうがいいのでは。

委員：

- ・さきほど「種の抽出はどういう基準で」というご意見があったが、鳥の分野からすると、事務局から送られてきた種別の分布図、全国の資料から個別に候補地を抽出しろと言われ、大変当惑した。全国分布図だけでは個別に抽出しようがない。
- ・分布図も、いろんなソースデータを1枚にされてしまっていたが、ソースデータはそれぞれ性格が違うので、ソースデータごとに分析をかけたものを重ね合わせるという形にしないと処理のしようがない。
- ・事実上、鳥については、「インポート・バード・エリア（IBA）野鳥重要生息地」の抽出結果を活用し、里地的な環境との組み合わせで、ラムサール条約など湿地関係のところを含め、湿地の外側での鳥の活動の区別が必要なところをピックアップした。
- ・事務局サイドでのデータ分析に関してはまだやり切れていないという印象を受けたため、こういうデータがあって、こういう分析方法をしたらどうかということを提示している段階。その辺の作業をやり直さないと、「科学的手法による抽出」にはならないと思う。

座長：

- ・今ご指摘のあった、元データによって違うものをまとめてしまうのはまずいということについて、最初に述べたのはそのことである。指標ごと、そのリソースごとのバックデータはつくっておかないと、後でどこを直せばいいかわからない、フィードバックができないということになるため注意してほしい。
- ・全国的なデータの精度の話は分かるがどうするか。ベースマップは全国で見るので、やはり統一的にデータがなければならぬ。それを次の段階で、より最新のデータ、あるいは現状を反映しているデータ等を使っていくという。今回のように、全国から平等に選んでいくというやり方の場合は少し工夫が必要かもしれない。

委員：

- ・全国データでは、少し古いためすでに絶滅してしまっている地域が含まれていることもある。

- ・モニ1000などの調査地は新しいデータが確実にある場所であり、保全活動や自然再生が行われて新しいデータをとっていると思われるため、データを根拠にするということなら、そういう地域を選ぶ方がやりやすいような気がするのだが。

座長：

- ・今のご意見は、全国均一のデータからではなく、例えば、モニタリングのスポットなど最新のデータがあるところを重視してはどうかということか。

委員：

- ・そう考えている。現在使用しているデータでも、専門家の皆が生息・生育しているということと言えるのであれば大丈夫かもしれないが。データを根拠にして地域を選ぶとなると、もう少し注意が必要。
- ・分類群にもよるが、全国データの不確かさは、かなりあると思われる。それをチェックするすべがないので、種の分布データから選定を進めるとしたら、選定された段階で、それで大丈夫かどうかのチェックが必要になる。このデータだけを使っていると、根拠になっていることが揺らぐ可能性があるのではないか。

委員：

- ・事前にいただいた生物分布図だが、これは環境省の自然環境保全基礎調査をもとに、幾つかの年度でやっているものを重ねているのだろう。私も、これは片目で見ているというか、当てにしていない。例えば、チャマダラセセリはかなり衰退が進んでいる種で、こんなにたくさんいたら、それはすばらしいと思うが、本当はもう点でしか存在していない状態。確かに、これを根拠にして選定をすると、大変なことになるかもしれない。
- ・例えば、モニタリングサイト1000里地調査は、現在進行形でデータがとれているものであるが、それは、全国およそ200カ所からデータが上がってきている一方で、やはり点の情報である。基礎調査はメッシュで全国をカバーしているが、モニ1000の場合はピンポイントのサイト情報という問題があって、ちょっと悩ましい。
- ・分布図については、ポテンシャルとして、こういうところにもこの種がいる環境がありそうだ、環境が整えば戻ってくる可能性もあるかもしれないぐらいの情報として見ていた。
- ・また私が昆虫の指標種を選んだ考え方だが、割とポピュラーなもの、都市化によって衰退す

るものということで種を選んでいる。「ポピュラーな」とした理由は、一般市民が自分の団体で見た種をインターネット上に挙げているが、そのときに、これは誰でも到底間違えないだろうと思われるものがないのではと考えたからである。

委員：

- ・モニ1000や保全活動が行われているところを重視したほうがいいと言ったのは、その後の社会的な条件にも関わってしまうが、せっかく選んだところは、活用しながら、生物多様性に関わるモニタリングを継続していくということが重要であり、その体制があるというところを選ぶことは意義が大きいのではないかと思ったからである。

委員：

- ・資料1の6ページが本年度の流れだが、今までのご意見は、段階に応じてそれぞれちゃんとしたデータ・根拠を見つけて、今年度中に最終的な重要里地里山を選定することを前提としているわけだが、もともとこのプロジェクトはここでは終われないもの。選定後に、選定されたものがちゃんと維持されるようにすることが大切。
- ・例えば、ヨーロッパの国の大半がやっているが、まず広めに選定しておいて、それぞれの場所で維持・管理に係る具体的な人を見つけ、その人材あるいは組織を通じてモニタリングし、適宜選定地を入れかえられるようにしなければならない。今のように、あるチョウがいたはずだけど本当はいないと、いないのなら、それを記録するようにしていく。選定地情報を見たときに、ある時点で死んでしまっているデータを幾ら見ても意味がない。
- ・そのためには、まずは広く、重要と思われる地域はたくさん選定しておく。あとは、そこに関わる人たちの熱意であるとか、モニタリングできなければ、選定しても維持できないので、それが組織的にできることが重要。それが全くないところは、選定から外れても仕方がない。
- ・そうなると、選定後については、地方の自然史系の博物館の学芸員にお願いするなど、その方法を本気で考えないと維持できない。選ぶだけではだめで、選んだ後の方が大事。検討会メンバーだけではなく、日本中の研究者が関わられるような仕組みにしなければいけない。
- ・資料1の最後のページにもあるが、地図上で選定地のポイントをクリックしたら、あの種はもうないとか、新しく見つけたとかという情報を関係者が書き加えられるようにする。どいう基準で選定したという結果だけではなく、そのさらに上を目指してほしい。

委員：

- ・最近は、あまりあちこち歩いていないもので、今回の抽出作業をするときに、スポットの名前が出てきても、昔はああったけど、今はどうなっているだろうかと思ったりもした。
- ・種もダイナミックに動いているが、里地里山というのはそういうところだから問題にしようということになっているのであって、最新の状態をすべてデータで表わせと言われても、これは今の科学の技術では不可能なこと。
- ・本来は、データに基づいたということ、いかにも科学的な言い方をすることに問題があるということなのではないか。いずれにしても、何らかのデータに基づく必要はあって、ただしそれらは、必ずしも完璧に里地里山のダイナミクスの現状を表わしているわけではないわけで、そのことは承知の上で作業をしているはずである。
- ・だから、外へ発信するときのことを考えて、そこがはっきり分かるような形でそうしたデータを扱うことが必要なものであって、作業としては、まずは今の方針で全国的に見て、さらに補完していくより仕方がないのではないか。
- ・さきほどのご指摘は、留意点ということであって、今の作業を否定するものではないのでは。

事務局：

- ・全国規模のデータを使って分析する部分もちろんあるが、それだけでは限界があることを昨年度実感したため、今年度、自治体に確認及び聞き取りを行い、地域の情報を集めたいと思っている。

座長：

- ・ベースは全国で共通・均質に、あとはスポットで。モニタリングサイトは誰かが選んだ場所のデータなわけで、それは次のステップで補正するためのデータとして使うということではないと、計画論としてはまずいだろう。
- ・ポテンシャルとダイナミズムという点で、最新データがあるならそれを活用すればよいが、もう一つ、維持管理体制のある地域をその後の継続のためにも重要だと考えるという視点は大切。今回「科学的根拠」と言っているのは、そこまでも全部含んでいるはずで、9つの指標は全部客観的な科学的評価としてやっていて、それ以外の社会・経済的なものは次のステップでと考えるとよいのではないか。

委員：

- ・里地里山の現在の変化は、ポテンシャルとか里山らしいダイナミズムが失われてしまったために、かつていたものがいなくなっているぐらいの変化が起こっているのだから、まだポテンシャルとダイナミズムが残っているところを選んで保全していくことが重要ではないか。

座長：

- ・それは当然。そういうものを選ぶために、モニ1000やラムサール条約の情報をスポット情報として加えると。それをどこへどう加えたらいいかは、ワーキングで研究していただくが、今日はそのところの議論をいただく会議であるから、ぜひそのことを記憶しておいていただきたい。

委員：

- ・資料1の2ページ目の基準2の定義が「種の多様性を確保」となっているが、これまでの議論でも、里地里山というのはみどり豊かな二次的自然ということで多様な種が存在するところという意味で理解してきており、こういう表現でもあまり気にしていなかったが、その次の「特定の種が生育する」ということも非常に重要なこと。
- ・種の多様性というのは、種の数が多ければいいというものではなく、これが外へ発信されるときにこの表現でいいのかということが少し気になった。ここで言おうとしているのは、多様な種が維持、確保されているということだと思ふため、資料公表にあたっては表現に留意いただきたい。

座長：

- ・進め方についていろいろ議論があったが、それぞれにデータをきっちりつくっておいて、いつでもそこにフィードバックできるようにする。また、先ほどのモニタリングサイトのよ様な別の観点も重要。今後の持続的な管理・運営のためには、組織もきちんとしているし、むしろそういうスポットのほうがむしろやりやすいのも事実であるため、後段では、社会的データとして地域を支えるマンパワーなどの情報も加えて評価できるようにしてみてもどうか。

【議題 2. 重要里地里山候補地抽出にかかる検討について】

【議題 3. 地域別分科会における検討事項について】

(事務局説明)

委員：

- ・候補地の一覧を見て、結構いいところが挙がっているのかなという気はした。私も幾つか実際に知っているところもある。
- ・一方で、東京都最高峰の雲取山など基本的に自然林のところが入っていたり、昭和記念公園や和白干潟が挙がっていたりとか、かなり幅が広くて、どういう基準で挙げられているのかと疑問を抱いてしまう。
- ・希少種などが入ってくると結構どこでも入ってしまうが、里地里山としてこれだけ幅があると、さらに追加するとなるとすごい数が出てきてしまう状況もあり、その辺りの考え方は整理し直さないとまずいのではないか。
- ・また、一覧の現地がどんなところか見てみたいと思うが、こういう地名や分布図だけでは状況が分からず、事務局には、グーグルマップのようなものでもう少し現地を確認できるようにならないかと話している。
- ・例えば、大阪南部のため池群、香川県のため池群など非常におもしろい景観もある。候補地一覧にはまんのう町、財田町で山側が対象だったが、海側にもため池がたくさんあり、そこは対象ではないのかなといったところもあり、地図で位置を確認できたらと思っている。一覧のバックデータとしては、地点、また各地の具体的な景観や生物データ、その辺が整理されていないと評価しにくい。

座長：

- ・雲取山を里地里山とするのは問題かもしれない。それは希少種などの話にウエートが置かれてそういう結果になっているのか。

委員：

- ・大学演習林も何カ所か入っているが、山がちな場所であったり、ざっと一覧を確認した限りでも「里地里山」にすごい幅があると感じた。

事務局：

- ・委員からいただいた情報をもとに事務局で場所を探す作業をしたが、航空写真上で探しているため、特に目立った地名がない場合、山の名前や川の名前を入れてしまっている。そこはもう一度情報をきちんと精査する。

委員：

- ・そういうことであるならば、「雲取山」と書いてある場所も三頭山の山麓付近とか奥多摩まで下がってくると、斜面で畑をつくっているところもある。

座長：

- ・三頭山なら数馬の辺までは里山と言ってもいいかもしれない。
- ・候補地の抽出方法について確認だが、さっき委員が言われた昆虫、鳥など、それぞれでまずベースがあって、専門的な見地でもう一回それにチェックを加えていくと、別のベースマップができるはず。そうしたものを全部重ねた上で挙げていただいたものなのか、それとも、それぞればらばらに提供して、そこから委員がこれがいいと言って選んでいるのか。
- ・例えば、鳥の観点からも昆虫の観点からも、それから、今の文化的な観点からも、全てでいいという言い方ではないのか。

事務局：

- ・情報は、ばらばらに提供して、抽出いただいた結果であり、そうとは言い切れない。

座長：

- ・私は、多面的にいろんなデータが高得点な場所であるというふうに想定していた。そうすると、各委員はどういうふうに捉えて抽出したのか。

委員：

- ・私は予選をやっているつもりで、まず挙げるだけ挙げましょうと。ほかの皆さんも挙げるだけ挙げてきて、それらを全部重ねて、その中からこれにしましょうというのを決める。その予選のための候補地であると思い、できるだけ対象となりそうな場所を入れた。

座長：

- ・予選でそういうことをやっているということが前提だったらいいが、多面的に、鳥の面からも昆虫の面からも、あるいは、ほかのいろんな希少種や植物など全部重ねて、一定の得点以上のものをもう一回重ねて、多面的にそこは非常に大事だということを出して、それに委員が地域別の観点でここはいいねということを確認すると。最初の想定はそういう手順ではなかったか。

事務局：

- ・その通りである。そのため、今回の抽出作業の際にはデータを重ねた結果も一緒にお渡ししており、そこを参考にされる方もいれば、委員それぞれの知見で、こういった情報があるからというふうに出していただく方もいらっしゃると思っている。

座長：

- ・それだとダブルスタンダードになるのでは。

委員：

- ・私も座長がおっしゃるような形でデータが提供されると思ったが、いずれにしても全て紙ベースで提供されており、さまざまなデータから適当な場所を抽出するのは、全国規模の紙ベースとかPDFで渡されてもやりようがない。そこで、個別のメッシュデータなどはないのかと事務局に聞いたりもしたが、実際にその作業を各委員がやるということになると、とてもできないというのが正直なところ。
- ・また鳥に関して、いろいろなデータが混在していたため、私のほうからは、自然環境保全基礎資料として繁殖地調査の結果があるため、それらを種ごとに重ね合わせて整理をしてほしいと提示している。それをやらないと、科学的なデータの分析は、鳥だけの部分からも抽出しようがない。

座長：

- ・資料2-2の参考（委員のみ配付）について、候補地と指標との関係でゼロと1と書いてあるが、例えばある候補地は、指標②と④だけが該当するという意味か。

事務局：

- ・その通りである。ただ、これは、あくまでも全国規模のデータを重ねただけの結果であるため、各委員の選定理由と一致するかどうかの確認はできていない。

座長：

- ・全国ベースで自然科学的な客観的なデータに基づくとということになれば、提示した指標でやるしかないだろうということだが、こうして当てはめてみると二つだけしか該当していないところもあるということか。
- ・なぜこの候補地が選ばれているのかという時に、この指標とこの指標が効いているからだ、ただ、例えば九つのうちの指標の二つだけしか該当していないが、委員とその他の関連データで重要な地域となりうるとなると、指標の重みはどうか。

事務局：

- ・既存の評価を得ている関連データについて、昨年度、指標を重ねたデータ分析の結果と比較すると必ずしも合致しないという傾向が見えていた。そのため、データ分析だけに頼らず実状に応じた選定ができるよう、今年はこうした方針に変更した。

座長：

- ・指標が9つあって、それを重ねる。これは一応、自然科学的なデータによる候補地素案の抽出だろう。その上に、委員が総合的な知見で判断すると。最終的に、地方のことをよくおわかりの先生方、あるいは、昆虫専門の先生方が、重要里地里山の中で特筆するならこの20カ所はどうしても離せない、全国的に見てこことここがやはりとても重要だと判断すると。結果的にそれが、今後の持続的な里地里山の保全活動において非常に重要な切り札になるのだから、それはそれでいいと思っている。
- ・しかし手順としては、自然科学的なデータで全国規模のベースマップができていて、それは、今言った多面的な、9つの指標でそれぞれのマッピングをされていて、それをさらに重ねたものがあるというイメージ。それは、全部平等ではなくて、こういう観点の里地里山もあれば、こういうほうの里地里山もあるというふうに側面が違うから。
- ・いずれにしても、そういうことでベースができて、その上に委員の判断、あるいは関連の話が入るわけで、公開時に選定したものについて、ベースは低かったが関連でこうだった、

あるいは総合的に見たときにここは非常に重要だという専門家の委員の判断があって選んだと、そういう説明ができるように、はっきりと分けておかないといけない。

委員：

- 例えば資料2-2の参考のさきほどの候補地について言えば、ここは、私が見たらこんな種がいるなというふうに思うわけで、逆に、この指標の振分け結果を見て、基準2の指標⑤から⑧は、本当は「1（該当）」でいいのではないかということが言える。
- 現在事務局で使っている指標のデータは、全国規模の基礎調査をもとにしているから、もともと候補地のような小さな地域のデータがないのである。

委員：

- さきほどから話題の候補地に関しては、何で里山として挙がってきたのか、ちょっと驚いている。私は、オオサンショウウオの調査で10年以上この辺りに行っているため知っているのだが、この辺りに里山なるものが一応あることはあるけれども、そこに重要種がいるのかとか、人が何か保護活動をしているのかというところから考えて、候補地として出てきたことは非常に不思議に感じるところがある。
- そういったことがある程度わかる場所もあるため、候補地として出てきたからには、これをもう一度検討させてもらって、委員の皆さんの最新の知見を入れて、これを取捨選択するというのをしたらいいのではないか。

座長：

- 今回の選定のプロセスはそのように考えていて、最終判断は分科会をつくって、土地をよくご存じの委員でやってもらおうということにしたが、後で、でたらめに選んでいるのではないか、好みで選んでいるのではないかと言われたいよう、前提になる整理をシステムチックにやっておいてもらう必要がある。
- また、スケールで抽出のされ方が違うというご指摘はそのとおりで、本当はローカルスケールでマップを手に入れてやっておく、さらにこれを翻訳して全国区に、そういう作業もあったほうがよかったのかもしれない。
- さきほどのモニタリングサイト1000は、サイトの設定の経緯はどうなっているのか。もしそこが今回の選定の趣旨とほとんど重なっているなら、逆にそれをベースにしてはどうか。

委員：

- ・まずコアサイトと言われるもの、これは100年調査をやるということを前提にしている、日本を9ぐらいの植生区分に分けて、そこから均等に選ぶということで、永続性、全国の植生から見たときの均一性みたいなことで18カ所を選んだ。それ以外に、いろいろな民間団体等が関わっている里地里山保全があるので、そこに手を挙げてもらい、NACS-Jが中心に委員会をつくり、挙がってきた候補地の中から選んでいる。コアサイト＋一般サイトで、200個ぐらいになるように選んでいる。
- ・調査項目が全部で9つあるが、9つの調査項目のどれができるかということと、その団体の取組の現状や年齢構成などを見て、これは無理だろうとかというものを判定して落としていき、結果的に180箇所程度選ばれている。

委員：

- ・モニ1000は、里地調査のサイト選定と、森林・草原の鳥類関係に関わっているため少し補足すると、実行上、モニ1000の場合、調査が主じゃなくて、調査ができる場所でないと選べない。そのため、手を挙げてもらったというのは、調査をする団体なりバックボーンがあるところということで、重要なところとかがあっても、当然、その周辺で調査を実施する主体がいなければ選ばれていない。
- ・それから、モニ1000の森林・草原の鳥類調査は、ルートを設定して調査するという形で、全国で400カ所ぐらいある。そこは、野鳥の会の支部の調査員が主体であったり、調査をお願いしている人がいたりするが、その人たちが、その地域で重要だと思われるところで森林とか草原部分、主に森林を選定して調査を行っているので、里地里山に比べると、かなり幅広い調査結果がある。
- ・森林・草原調査は最新の調査結果といえるが、一方で、コアサイトは大学の演習林などで、専門的な調査がかなりシステムチックに行われているところ。愛知の東大演習林などは、もともとベースが里地的なところなので、データで使えるところもある。

座長：

- ・こういう手順でこうして選ばれたということだけはきちんとしてほしい。今後も追加の可能性があるので、むしろベースは広げておいたほうがいいわけで、そこを意識しながら、

それぞれの地域ごとにこれからの分科会で議論してほしいと思っている。

- 例えば昆虫を指標に全国的に里地里山の保全活用ということを考えたときに、これがベスト10ですねというようなものがちゃんと入っていると、鳥から見たらこうだと、それぞれ入っていて、それはそれで一つの価値観。
- まず指標①から⑨まで、平均的に、ほぼ均質的なベースがあって、そこをちゃんと先に評価したうえで、こういう観点が入って選ばれたというようなフローが必要。
- また、今後の持続的体制・人がいるかはとても大事で、この委員会はそういうことを価値観として持っており、社会的・経済的データとして、専門的知見、研究者がローカルエリアで頑張った地域を非常に重視しようとしていることは分かっている。ただ、プロセスとして、いきなり最後が出てしまうのはやはり具合が悪い。ベースは全体を見回しながら、そこから絞り込んでいって、最後に総合的判断が加わったという位置づけではないか。
- 各専門家の目と、客観的なデータとの重ね合わせの結果であるということが必要。

委員：

- 資料3-1にも「選定地の規模の確認」と入っているが、隣接する地域との統合、一体化した地域の分断の必要性についても確認を行う、「統合と分断」という言葉がある。ただ例えば、阿蘇の草原など、昆虫の生息環境からいったら、切れないわけで、全部と言うしかない。現在は周辺市町村を含む最大の規模になっていると思うが、これはどうするのか。

座長：

- 地域別分科会で詰めていただくために、どのくらいのスケール、サイズであるとか、件数がどうだという議論をしておく必要がある。まず総数から考えたほうがいいと思うが、事務局では今回の資料で550カ所程度という数を目安として示している。それは、重要湿地が500箇所、海域が300箇所ということも関係あるようだが、里地里山というのは、国土面積から言うと湿地より遥かに広域をカバーした土地利用であるため、湿地並みでいいということもないのではという気はする。
- もう一つは、各省にもおいでいただいているように、里地里山は多様な観点を持つということ。瀬戸内海の漁村では、背後の里山に対して、耕地が少ないものだから、3年間農地として使ったら今度は30年間森に戻すというような土地利用を行っているというような話を知って、日本の国土というのは本当にいろいろな土地利用があり多様だなと思った。こう

した非常に厳しい漁村は、まさに日本的な里地里山の保全と活用と、日本人の歴史である。

- 愛媛県宇和島の遊子のジャガイモ畑を見ると、こういう生き方をせざるを得なかったというところがあったと、これは結構重要なことで、単に生物の多様性の話だけではない、日本文化そのものだと思う。
- 農地や猟師の生活、そういうものも一方にあり、都市型農業で関東の三富にみられるような雑木林などもあるわけで。そういうことを考えると、最終選定地は各省の文化的景観から農水省の仕事まで含んだ場所であってほしい。
- ただ、選定後の維持、ずっと国民活動が対応できるのかということも考えなくてはいけない。選定はしたが何もしていませんということが続くのでは本末転倒であるし、その辺も含めて、数字で目安が立つということではないとは思いますが、最初から550箇所程度とはせず、2段階ぐらいで考えてはどうか。まずベースで、それから鳥で、昆虫で、植物でどうと、多面的な側面からそれらの上位が全て入り、かつ、今の農法や焼畑などにも着目し日本を代表するものは一通り含んでいますという形にしていくことが、むしろ今後の発展のためには大事ではないか。
- 当初は、データがあって、それらを機械的に重ねて行って最後に委員に選んでいただければと思っていたが、皆さんの意見を伺っていると、もう少し使い勝手や持続性も考えて選定した方がいいのではと思った。
- 最終的な選定数はこの委員会で判断することとし、手前で幾つかの段階的目安として、1,000箇所程度から800箇所になって、500箇所になってという形で進むとよい。その際、どの線によしとするか、あるいは、むしろどこを重視したほうが重要里地里山という意味を達成できるかというようなことを、次回の検討会のときにやるということで、そのためのスタディを足しておいてほしい。
- 各委員からもう一度それぞれのお考えを伺って、複数の観点をベースに幾つか組み合わせをつくって、その上で総合判断をすると。その際も、スリーAとダブルAぐらいの情報をつけておいて、最終的な調整を検討会の場で行うという手順でもいいのではないか。

委員：

- 基本的にその方向でいいと思う。自分は山専門なので、候補地を選ぶ際、まず畜産との関係、淡水魚との関係、農業との関係、伝統工芸との関係、さらに、暮らしと水源との関係、それが現在どういう形で守られていて、住民サイドがそれと関わっているかということに着

目して抽出した。

- ・そうしたことを候補地と一緒に書いて提出しようと思ったが、大変な仕事になってしまうもので、そこは未記入のまま出している。例えば、演習林とあるのは、わかりやすいから地区名としてそう書いたが、そこには集落があって、里山との関わりをちゃんと持っていて、そういうところで活動が始まっている、そういう視点で選んでいる。
- ・里地里山には広い側面があって、これからの日本の国土を守っていくうえで重要な拠点に、また外国に対しても見本になっていくのではないかと思うため、できるだけ広い側面から選定できるようにしてほしい。

座長：

- ・今の、各委員による「こういう観点で」という情報は、全ての委員が共有できるようにしてほしい。それぞれの専門家に改めて情報提供していただいて、そのうえで地域別分科会を開催できるようお願いしたい。

委員：

- ・私も同じような視点を持っていて、生物多様性保全上重要というのは、例えば、ラムサール条約等で指定されているところもあるが、そこがイコールになってはいけないだろう。ただ、生物多様性保全上重要な里地里山ということで「里地里山」とつけた以上、ダイナミズムの点が大きく評価されていなければ、他の選定地との差別化がはかれない。
- ・私の抽出の観点は、潜在的なポテンシャルがある、そこに過去ダイナミズムがあった、現在もダイナミズムが続いている、未来も続いてほしいという視点だが、それらをちょっと入れ過ぎたのかもしれない。
- ・例えば、候補地として挙げた中に里地里山でいえば老舗な地域があるが、その老舗はもう活動もしていないのだろうなと思ってインターネット上の関連サイトを見てみると、まだ活動している。その活動の歴史の中でテーマをどんどん変えていき、人を呼び寄せている。そこが生物多様性保全上どうかという点と違うかとも思いつつ、20～30年ぐらいの歴史で地域のそうした活動を引っ張ってきた場所であるため候補に挙げておきたい、また、そこについて県はどう判断しているのかというのを逆に聞きたいと思い、候補地として入れた。ここは、もともとゴルフ場の跡地で、開発を止め、種を守ることにした。他と比べるとポテンシャルは低いですが、ダイナミズムという点では30年間ぐらい地域の活動の歴史を引っ張

ってきた場所で、かつ現在まだ活動が続いている。そうした意味でも非常に象徴的に捉えられる場所ではないか。

- 同じような視点で、例えば、都市近郊の公園を挙げているが、都市の中であるため実は里地里山のメッシュからは外れている。メッシュをつくった際に、都市公園内ということで対象外としたが、隣接した地域でさらに数百haの保全が始まり、今では全国のトラストのモデルになっている。
- 日本からSATOYAMAイニシアティブを発信していくうえでダイナミズムの視点を入れ込むことは大事と思うがどうしたらいいのだろうか。どこをどう選定すると、重要里地里山として一番有効なのか考えていた。
- 生物多様性保全上のポテンシャルは十分だが、活動は行われていない、調査やモニタリングだけ行われている地域についても、ダイナミズムの視点で議論することもできるのではないか。理想は、先ほどの基準1、2、3それぞれが満たされていて、ダイナミズムも合わせることである。

座長：

- こうして具体的な地名が出てくると、都市公園的土地利用な地域などが含まれていると、一般的には混乱を招くかもしれないが、日本の国土全体と国民との関係というか、保全活動への市民参加が進み、里地里山が元気になって保全されていくべきと考えれば、都市公園といってもその地域で実際里山的に保全活動をやっているのであれば、それは対象とすべきかもしれない。
- ただ、最終的にこれらの結果が並んだときに、例えば高尾や奥多摩など、サイズが全然違う。数haしかないものと何百haというものが並んでしまうと、重要里地里山というのは一体どういうものなのかと。概して日本のマスコミは平均的にものを見てしまうため、そんな出鱈目はないじゃないかと言われかねないと心配ではあるが、里地里山というのは、それぞれの場所によって相対的なもので、絶対的なものではないため、誤解されないよう、多面的な側面があって、それぞれ意味があるのだという言い方をすることが必要かと思う。
- 地域によって、大都市圏の場合はこういうサイズに、地方ではこういうサイズに、ただし豊かな生物多様性を持った地域はちゃんと選んでいますと。国外の方にも、日本の里地里山は極めて多様で、人間との関係性も極めて多様だということを示せると。そういう前書きがあって、さっき言った論理的なプロセスがあって、だからこういう結果でもおかしくな

ということがわかるようにする作業が必要。

- ・選定地の一つずつにベースの情報があつて、ここが選ばれているのは希少種とかの視点ではなく、市民の継続的な参加や、都市部の中では貴重でそこにあることに意味があるという評価で選ばれていますという、総合点じゃなくて特別の位置づけで選ばれているということとで評価の多面性が示せれば、広く納得いただけるのではないかと。

委員：

- ・ちなみに、さきほどの都市公園は、県の里地里山エリアからは外れている。生物多様性の面でいえば、ホトケドジョウもヘイケボタル・ゲンジボタルもいる。県内の希少種という視点であれば、公開はされていないが実は宝庫であり、県内で最も生息している場所かもしれない。ただ、県としては里地里山外であり、都市公園というか一連の都市内緑地の該当地。ただし、生物多様性保全上は県内で一番豊かという点で悩ましさも含んでいる。

委員：

- ・今の「県として里地里山とみなしているか」というのは、都市計画上の地域指定の問題ということか。そういう法律的な地域指定とこれを連動させるかどうかというご意見かと思つたが、この選定の枠組みはそれとは関係ないのではないかと。
- ・面積は、ラムサール条約登録地も、琵琶湖みたいなどころからかなり狭いところまでであり、生態系的にどう機能しているのかを考慮した上で、実際の選定の際に、複数自治体にまたがるとやりにくいため分けた方がというようなものがあれば、そこで考えればいいのでは。

委員：

- ・生態系的にということであれば、さきほどの都市公園を含むもともとの照葉樹林と、東京湾に流れている侍従川にも保全活動が行われているところがある。横浜海の公園や野島公園も、生態系ネットワークは完全にでき上がっており、例えば、間に農家があるが、農薬などはほとんど使っていなかったり、人工的なものは入っていない流域圏、森・里・川・海が全部つながっているという場所である。
- ・各県の政策的な国土利用の視点を外すと、一連で、という場所が出てくる。実際、少し枠組みを外していかないと、森・里・川・海のネットワーク形成はなかなか難しいだろう。里地里山という議論をするときに、はさまれた都市の部分をどうするか考える必要がある。

選定の最後に、生態系ネットワークの枠組みの中で拾っていくとまたおもしろいというか、本来の重要里地里山の意義が出てくるのではとも思う。

座長：

- ・やはり選定地それぞれに、なぜここは選ばれたかというコメントが必要だろう。国民に関心を持ってもらうため、公表時に、例えば昆虫の面で日本全体でのベスト10みたいな、ここはこういう観点で選ばれているということを、多様な保全活動のモチベーションとなるよう示せると良い。
- ・今まで生物多様性という言葉だけでよく分からないというようなことがあったとしても、農法の歴史や、そういうバックグラウンド的な話を通じて里地里山の多面的な姿を見せることができればなかなかおもしろい。逆に、選定のプロセスで混乱ぎみであったことも、それを上手に反映できるアウトプットをつくれれば、結果的には大変意味のある仕事になるかもしれない。
- ・こういう観点ではこれは重要、だけどこれはもう少し別の観点でみてもいいかもしれないというような、そういう柔軟な判断もいただきながら、全体でバランスをとっていきたい。

委員：

- ・哺乳類の観点から地域を選んだが、次の分科会に向け参考までに説明しておく、哺乳類の場合はかなり広域的に捉えないと保全ということが考えられないため、エリアも、広域的に見るレベルと、特定の地区として見る二つのレベルがあるのだが、特定の地区を選ぶ際には頼りになるデータがない。例えば、ニホンイイズナやクロホオヒゲコウモリという名前を出しているが、これはエリア的に、候補地一覧の540箇所と非常に重なっているところもあるが、近いけどちょっと離れているようなところもあり、そのどっちにしようかなといったときに、この動物がいるところのほうがいいのではという、そういう観点で挙げである。希少種ではあるが、指標種のような位置づけで情報を出しているという説明をつけ加えておきたい。

座長：

- ・ただいまのご発言のように、ここで共有しておいたほうがいいご意見があればどうぞ。

委員：

- ・確認だが、ほかで里海の選定はしていて、ここでは里海を含むところは入れなくてもいいということか。

座長：

- ・里海絡みの里山は入れるという話ではなかったか。里海100選というのはあるのか。

自然環境計画課長：

- ・里海というと海域、沿岸域のことをおっしゃっているのだと思うが、重要海域は海の部分を選定しているものである。

座長：

- ・であれば、ここで里海は入れるのだろう。さきほどの、森から川に行って海までという、生活絡みのものはこちらで入れようということでは。
- ・藻場も、里山絡みで関係が深ければ入れていいのではと思うが、里地里山の概念は、里海・里湖などみんな含んでいるため、保全活動をする市民の視点から見たらいいのではないか。そういう視点で、そこを入れておいたほうが効果的だと、一体的にやれるのではないかというようにすればいいのでは。

事務局：

- ・今回、候補を挙げていただくプロセスで先生方に非常にご負担をおかけしているが、これからの整理に向けて、さらに個別に先生方にお尋ねするようなことがあろうかと思うので、その節はよろしく願いしたい。

座長：

- ・むしろこれからが大変かもしれないが、先生方のお力で、ぜひ国民的な支援、支持を得られるような重要里地里山の選定をお願いしたいので、どうぞよろしく。

以上